

# 人・まち・社会の健康で創る近未来都市像 子どもたちが生き生きと育つ図書館城下町

おおき さとる  
大和市長

## 市政運営の基軸は『3つの健康』

大和市は、神奈川県ほぼ中央部に位置し、都心から40km圏内にある南北約9km、東西約3kmの、起伏が少ない平坦な地形の市である。

市内には、私鉄3線が乗り入れ、新宿へは小田急江ノ島線で約50分、渋谷へは東急田園都市線で約40分、横浜へは相鉄本線で約30分、市内に八つある駅から1km圏内に居住する市民の割合は80%に達し、交通アクセスに優れ、ベッドタウンとして発展してきた。

その上、東名高速道路や国道246号、東海道新幹線という交通の大動脈が市域を貫き、東名高速道路の横浜町田ICへも近く、アクセス性が非常に高い。

また、約80の国と地域の外国人が居住する多種多様な国際色豊かなまちに、市立病院、スポーツセンター、野球場、下水処理場、ゴミ

焼却場、斎場、厚木基地等が所在し、狭い地域に実にさまざまなものがそろった、いわばコンビニエンスストアのようなまちといえる。

昨年市制施行60周年を迎えた大和市は、市制施行時(昭和34・1959年)の約3万5千人から、現在の23万9千人強(令和2年8月)に至るまで、コンスタントに人口を増やし続け、人口密度は県内第2位となっている。

全国の地方都市が人口減少に苦しむ近年においても、大和市が成長を続けてきた背景には、恵まれた交通事情などだけでなく、大和市が実施してきた先進的かつ地道なまちづくり施策・事業の存在がある。

だがそんな大和市にも、少子高齢化に付随する人口減少への流れの予兆が、徐々にではあるが、表れつつある。大木哲大和市長は、大和市の現在の人口状況について、次のように語る。

「昨年9月に発表された日本の高齢化率は、一昨年より0.3ポイント増加し28.

4%となりました。

令和7(2025)年には30%、令和12(2030)年には31.2%に

上昇すると予測されています。国全体の人口は、前年比で一昨年在マイナス44万4千人、昨年在マイナス51万2千人となり、減少の幅を確実に広げつつあります。

そうした中、大和市の人口は私が市長に就任(平成19年)して以来、昨年までの足掛け13年間で約1万5千人増え、現在も少しずつ増加しています。また高齢化率は現在23.7%と全国平均を下回っており、転入数が転出数を上回る転入超過率では、全国





大和駅前に建つ「文化創造拠点シリウス」

約1700の市町村のうち17位とかなり上位に位置しています(数値は『2019年住民基本台帳に基づく総務省発表』より)。  
しかし、それらはあくまでも他市に比べて——ということであり、実際には高齢化率が21%を超えた段階(※平成25・2013年度)で、本市も超高齢社会に入ったわけです。そのことは以前から予測されていたこ



シリウス1Fでは、開放的な吹き抜けのもと、図書館の本を並びのカフェで読める

とで、平成28(2016)年に策定(第1期)し、今年3月に改訂(第2期)した本市の人口ビジョンでも、ピーク(24万人台)を令和5(2023)年に迎えると予測しています。そうした想定の下で、私は市長就任以来、誰もが願う『健康』を施策の中心に据え、さまざまな取り組みを実践してまいりました。平成21(2009)年に『第8次総合計画』を策定し、市制施行60周年に当たる昨年に策定した『健康都市やまと総合計画(第9次総合計画に相当)』においても、第8次計画から引き続き『人の健康』『まちの健康』『社会の健康』からなる『3つの健康』を市政の目標としてうたつて



います」  
このように、大木市長は市長就任以来、一貫して「健康を基軸とする市政運営」を展開してきた。平成20(2008)年に「健康都市連合」に加盟すると、市制施行50周年の節目となった平成21(2009)年に「健康都市やまと宣言」を発信。その後、市政全般にわたる健康都市づくりへの幅広い取り組みが評価され、大和市は「健康都市連合国際大会」において、これまでに3回、表彰を受けている。  
また、大木市長は、平成28(2016)年、中国・上海において120カ国が参加し開催された「第9回WHO(世界保健機関)ヘルス・プロモーション国際会議」へ招待され、わが国の首長として唯一参加し、大和市の健康施策の取り組みを発表した。



学校図書館は今や子どもたちのくつろぎの場(林間小学校)



国際学校図書館協会からも視察団が訪問(文ヶ岡小学校学校図書館)

### 『3つの健康』の基は子どもたちの育ち

「健康を基軸とする市政運営」の基盤づくりの一環として、大木市長が就任直後に着手したことの一つに、市内全小中学校に設置されている学校図書館の改革がある。それは「子どもたちが生き生きと育つまちこそが『3つの健康』の基であり、とりわけ子どもたちにとって、読書は想像力や思考力を育み、個性豊かな人間形成を図る上で欠くことのできないもの」(大木市長)だからだ。

学校図書館の改革は、大木市長の学校図書館の視察から始まった。

「私が学校図書館の視察を通じて、痛切に感じたのは、一言で言えば活気がないということでした。人の気配があまりない図書館。全体として暗い印象でした。そのため、学校図書館を子どもたちが集い、明るく活気ある場所に変えていこうと決心したのです」(大木市長)

まず、全ての学校図書館をリニューアル。子どもたちにとって居心地の良い空間とするため、書棚や机の形、カラーリング

グなどにも配慮した図書館づくりを行い、子どもたちが行きたくなるような場所に変え、人が集まることよって明るい学校図書館へがらりと変わった。このことはNHKの報道番組でも取り上げられた。二点目として、市立小中学校全校(28校)に学校図書館司書を配置。各学校の実情に応じた、きめ細かな学校図書館運営を行うなど拡充を図った。三点目は、学校図書館司書のリーダーとなるスーパーバイザーを配置した。このスーパーバイザーを中心に、学校図書館の蔵書の選定・充実を図った。

「学校図書館に関するさまざまな取り組みがあいまって、文部科学省からも高い評価を



親子で遊べる公園「星の子ひろば」と「市民交流拠点ポラリス」

いただき、ここ9年間で本市の小学校4校が読書活動優秀実践校として文部科学大臣表彰を受賞しています。また、子どもたちの読書量も増加し、昨年1年間の1人当たりの読書冊数は、小学生が202冊、中学生が58冊となりました」(大木市長)

こうした成果は各方面から注目を浴び、国内はもとより海外からも視察に訪れるほど、大和市の学校図書館は大きな変貌を遂げたのである。学校図書館のこうした改革は、市の図書館施策全般の改革につながり、ひいては大和市の文化政策全般の基盤にもなっている。

その代表例が、平成28(2016)年11月、地域の中心部に位置する大和駅前にオープン

した文化創造拠点「シリウス」だ。シリウスには、1F〜6Fまで全館が図書館というコンセプトで、階ごとに特色あるフロアが配置されている。

シリウス誕生の反響は大きく、アンケートによる地域活動の各種ランキング調査などを行う地域応援サイト「生活ガイド.com」が今年3〜4月に実施した《利用したい図書館ランキング》において、全国の図書館の中からシリウスの図書館が見事1位に選ばれた。受賞理由には「大和市の中心的拠点施設として、多様なジャンルから幅広い蔵書をそろえている。子ども図書館の空間も広く、図書館員による絵本の読み聞かせや紙芝居などが盛んに行われ、子どもも大人も楽しめる図書館」であることが挙げられている。

また、日経B P総研による行政視察受け入れ件数調査では、シリウスが平成30(2018)年度に全国第1位と2件差の第2位となっている。

## 「健康都市」のシンボルは 図書館城下町

「大和市の学校図書館と市立図書館に共通するのは、利用する子どもたちや市民の皆さんの居場所であり、かつ、文化を楽しむ場所になっているということです。例えば、シリウスの図書館では、さまざまな仕掛けを市民目線で提供することで、日本一來館

者数の多い図書館になっていると思います」  
(大木市長)

シリウスは、開館以来多くの来館者でにぎわい、年間来館者数300万人を数えるまでに、令和2年(2020)1月21日には、開館から3年2カ月余りで累計来館者数1千万人を達成した。また、駅前の商業ビルの3Fの一部を市が借りて平成30(2018)年4月に開館した中央林間図書館は、面積約770㎡程度の小さな図書館ながら、駅前という立地を生かし、開館初年度の来館者数は約87万人となった。この数は東京の日比谷図書館の来館者数を超えるものだ。さらに、高座渋谷駅前の渋谷図書館は従来の図書室からの



厚木基地の南側に隣接する公園「大和ゆとりの森」

格上げにより、自動貸出機の導入や閲覧席のレイアウトを変更するなど利用しやすい図書館へと展開している。

『健康都市』の構築を目指す大和市がいう『健康』とは、先に触れたように、市民が心身ともに健康に暮らしていくための《人の健康》、安全安心が確保され、快適な環境や都市空間が整えられた《まちの健康》、地域のコミュニティや経済活動が充実し、豊かな人間関係やまちのにぎわいが育まれる《社会の健康》であり、健康都市づくりはそれらが三位一体となったまちづくりだ。大和市の個性豊かで、内容が充実した図書館で過ごすひと時には、それらの要素がさまざまな形で凝縮さ



昨年3月に完成した防災機能を備えた公園「やまと防災パーク」



プロ野球、大学野球、高校野球などでも利用される「大和スタジアム」



「女子サッカーのまち」を掲げる大和市のスポーツ拠点「大和なでこスタジアム」

れている。

『「3つの健康」への視点が生かされたまちづくりをバランス良く実践していけば、おのずと幅広い年齢層の市民が居心地の良さを感じ、このまちに住んでいて良かったと思っただけなのではないでしょうか。また、幅広い年齢層の市民が常に循環する形で、ある一定以上の人口規模を保つことができれば、そこそが『健康(持続可能)な人口構造』と言えると思います」(大木市長)

城郭を中心に町割りを行う城下町になぞらえ、図書館を中心にしたまちづくりを意味す

の学校図書館での読書施策の推進など、市内全域にわたって本や読書に関わる取り組みが「図書館城下町」を旗印に推進されているのだ。

こうした図書館施策の拡充をシンボルに、持続可能なまちづくりを図る大和市の大胆でユニークな試みは、これからますます進化していくことだろう。

### 一体化する《まち》《健康》《図書館》

さて、冒頭に述べたように大和市は細長い

形の市域が特徴的だ。大和市の表現によれば、細長い市域には「3つの軸」があり、南北に並ぶ「3つのまち」で構成されている。

「3つの軸」の一つ目は市域中央を南北に貫く鉄道や幹線道路沿いに都市機能が集積するライン《やまと軸》だ。また市域の東側を流れる境川、および西側を流れる引地川沿いに展開する水と緑に恵まれた自然豊かな二つのラインを《ふるさと軸》と名付け、合わせて「3つの軸」としている。

「3つのまち」の一つ目は、主に大正末期から昭和30年代にかけて実施された林間都市開発(小田急電鉄が主体となった宅地開発)、および主に昭和30年代から50年代にかけて実施された東急多摩田園都市開発(東急電鉄が主体となった宅地開発)で誕生した住宅地群と、古くからの集落が良好な住環境を形成する《北のまち》だ。

同地区では、大型集合住宅等の開発が今も盛んで、現在進行形で人口増が見られる。鉄道駅でいえば、小田急江ノ島線・東急田園都市線の中央林間駅、小田急江ノ島線南林間駅、および東急田園都市線つきみ野駅などの周辺地区を指す。

二つ目は昭和初期の戦時体制下に、現在の相模原市や綾瀬市、大和市などの広域エリアで実施された「軍都計画」に基づき、市街地整備が進められ、戦後も継続的に都市機能が集積してきた《中央のまち》だ。地形的にも大和市の中心に位置する小田急江ノ島線と相鉄本

# 大和市

市 政 ル ボ

(神奈川県)



大和市の地勢を構成する「3つの軸」の一つ引地川

線の大和駅を中心とする地区を指す。ちなみに綾瀬市と大和市にまたがる広大な「厚木基地」は、軍都計画で建設された基地から、米海軍と海上自衛隊が共同使用する基地へと変わり、現在も所在している。

三つ目は昭和40年代・50年代から行われてきた土地区画整理事業によって生まれた、ゆとりある宅地と昔ながらの街並みが共存する小田急江ノ島線高座渋谷駅を中心とする《南のまち》だ。この地域には古寺社が多く、農地も比較的多く残されている。

そして引地川と境川からなる二つの《ふるさと軸》はこれら「3つのまち」に潤いを与える

ように、市域東側(境川)と西側(引地川)に位置している。両川の周囲には数多くの緑地や公園が整備され、地域の随所に残された雑木林とともに緑のベルトラインを形成、大和市の特徴的な景観をつくりだしている。

さらに《やまと軸》の中心をなす小田急江ノ島線が「3つのまち」を縦断。東急田園都市線は東側から《北のまち》に乗り入れ、小田急江ノ島線と中央林間駅で接続している。とりわけ東急田園都市線が昭和51(1976)年に町田市域から延伸し、大和市内に新駅・つきみ野駅ができ、昭和59(1984)年に現在の中央林間駅まで延伸したことが《北のまち》の人口を大幅に増やす契機となった。同時に10万人台から20万人台へと、大和市全体の人口を、短期間に大きく引き上げることにつながった。

また相鉄本線は小田急江ノ島線と《中央のまち》の大和駅で交差し、市域中央部を横断。国道246号と東名高速道路も《中央のまち》を横断し、国道16号は《北のまち》の東側を通り抜けている。

まさに網の目のように、鉄道と幹線道路が緑豊かな市域全体に張り巡らされている。その「網の目ぶり」は、前述のとおり八つの鉄道駅から1km圏内に居住する市民の割合が80%にも達していることからよく分かる。換言すれば、地域の多くの地区が、駅からの徒歩圏内にあるということになる。大和市は「交通至便」という不動産用語が、字義通りに成

立しているまちとも言えるだろう。

そして大和駅前のシリウスの図書館を《中央のまち》の新たな核とすれば、《北のまち》の核は中央林間駅前の商業ビル東急スクエア内に設置された中央林間図書館。《南のまち》の核は高座渋谷駅前の複合ビル・イコーザ内に設置された渋谷図書館ということになる。

まちと一体化しながら新たなにぎわいの拠点となり、文化発信の基盤ともなっている市立図書館のこうした充実ぶりは、持続可能なまちづくりを目指す大和市施策の三つの柱《人の健康》《まちの健康》《社会の健康》を映し出す、まさに鏡のような輝きを放っていると言えるのではないだろうか。

(取材・文 遠藤隆 / 取材日 令和2年7月28日)



大和市には林間都市の所以(ゆえん)である雑木林が随所に健在